AMDA
多様性の共存
ジャーナル

2011 年 10 月 25 日 VOL.34 第 259 号 定価 550 円
発行／ AMDA 〒 700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1
TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717
E-mail:member@amda.or.jp

2011 年
秋 号

秋

緊急救援 救える命があればどこへでも

東日本大震災復興支援活動

特定非営利活動法人アムダ（AMDA）
http://amda.or.jp/
特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構
http://www.amda-minds.org/
特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター
http://amda-imic.com/

現在実施中の復興支援活動場所と活動内容の一覧

岩手県釜石市	④国際奨学金
岩手県上閉伊郡大槌町	①病院 3 か年支援 ②鍼灸・健康支援 ④国際奨学金
岩手県大船渡市	④国際奨学金
宮城県気仙沼市	③病院支援
宮城県仙台市	④国際奨学金
宮城県本吉郡南三陸町	①病院 3 か年支援 ④国際奨学金
宮城県登米市	①病院 3 か年支援

岩手県大槌病院で地元医師の代診を行った AMDA 鈴記医師（左）

膨大なカルテの整理を行う学生派遣者

志津川病院をサポートする AMDA 看護師、薬剤師ら

① AMDA 被災地病院支援 3 か年計画

県立大槌病院、公立志津川病院に対し、震災から 3 年間、医療器具の提供や医療スタッフの派遣を実施。

夏季、冬季、春季に 2 名の医師を 1 週間ずつ計 2 週間派遣し、医師が休みを取れるようにする。また地元医師の開業や病院運営に必要な物資の提供なども行っていく。

本年度夏季派遣としては、医師、看護師と医学生、看護学生の派遣を行っている。7 月から開始し、学生派遣については 9 月 17 日まで行った。看護師派遣については現地のニーズに合わせて現在も継続しており、今後は現地雇用なども実施していく予定。

※派遣者ののべ人数と内訳
5 月 1 日から 9 月 27 日までの派遣者 90 人
内訳：医師 7 人、看護師 17 人、薬剤師 2 人、調整員 15 人、心理士 2 人、鍼灸師 1 人、医学生 20 人、看護学生 26 人）
（4 月末までの緊急救援派遣者数 149 人）

② AMDA 鍼灸師・健康支援プログラム

高齢者の多い被災地の健康をサポートするべく鍼灸とマッサージで被災者の健康をサポートする。また地元の被災した鍼灸師をバックアップすることによって、コミュニティーに根差した医療を目指す。同時に、明治国際医療大学と協力のもと、「地元鍼灸師支援」や「緊急活動の現場で活躍できる鍼灸師の育成」を図る。被災した県立大槌病院が仮設診療所を開設するにあたり、その近くに土地を借用し、AMDA 健康サポートセンターを建設する。建設には、近畿大学、日本福祉大学のまちづくりの専門家が同プロジェクトを監修し、地元の資材を使用し、地元の建設業者に依頼する。現在、建物の申請を進めており 10 月中旬に着工、12 月上旬オープンを予定している。恒久的に使用できる可動式の建物であるため、町の復興に合わせて、同建物を移設して運営を継続することが可能である。鍼灸治療室を中心とした地域住民の集いの場所、憩いの場所として活用される予定。（9 月 27 日現在）

③宮城県気仙沼市・猪苗代病院復興支援プログラム

気仙沼市の 3 つの中核病院の一つである猪苗代病院は、建物の損壊、備品の破損やスタッフの不足など、同地域の同格病院に比べ、復興が著しく遅れている状況となった。AMDA 病院からの要請を受けて、医療器材を含む物資の提供を行った。また看護師人員不足のため人材募集及び紹介協力などを行った。今後も物資や人的支援の呼びかけを行う予定である。

④ AMDA 東日本大震災国際奨学金（4 ページに生徒の声紹介）

被災地の学生を支援する期間 3 年間の返済義務のない奨学金で、奨学生が国際人としての視野を養うこと、そして将来は後輩へチャンスを与える人材に育ってほしいという願いも込められている。現時点では被災地の高校 5 校、専門学校 1 校に在籍する高校生を対象としている。奨学生の選定は各学校が行う。対象は、将来医療人を目指す学生であることを原則とし、各校において、各学年 5 名× 3 学年対象とすることを原則とする。支給額は、月額 15,000 円で、9 月末でほぼ 6 校全員への支給を開始した。

2011年度AMDAモンゴル国眼科医療奉仕団派遣事業II

ウランバートルのCity Opticで健診する菅波医師

2010年度のモンゴルにおける眼科医療支援活動（検眼師セミナー、白内障手術提供プロジェクト）に続き、モンゴル側からの要請を受け、本年も6月13日から18日まで、モンゴル全土の眼科医、眼鏡関係者を対象に子どもの弱視をテーマに検眼セミナーを実施。さらに8月23日から30日まで眼科支援事業を実施。6月のセミナーを受講した眼科医による弱視の子どもの診断と眼鏡の無償提供を行った。弱視の子どもは内科疾患を持つ傾向があるとの眼科協会の指摘を受け、菅波代表による弱視の子どもの健康相談。眼鏡学校設立に向けて準備を進めるモンゴル側とともに政府関係機関への後押し。日本モンゴル友好病院開設準備、モンゴル赤十字との協力協定締結準備、日本大使館、モンゴル保健省などへの活動報告などを行った。モンゴル保健省からは、AMDAのモンゴルにおけるこれまでの医療支援に対し、同国の保健衛生行政90周年記念メダルが授与された。弱視の子どもへの眼鏡提供とともに行った菅波代表の健康相談では、1000Km離れた田舎から相談に来た親子もいた。眼鏡の提供を受けた子どもは3歳から17歳の13人。保護者や本人から「よく目が見えるようになった」とか「わざわざ日本から来てくださって本当にありがとう」等のメッセージが寄せられた。また昨年白内障手術の提供をうけたノモハン事件従軍者の戦争体験談を同行した岡山大学学生8名、モンゴル健康科学大学の医学生4名とともに聞いた。学生から「なぜ戦争をつづける勇気があったのか」と言う質問に「友人が何人も自分の間近で殺されていくのをみると、憎しみが自分に戦争を続けさせた。本来、人はだれも戦争などしたくはない。ただその憎しみが次の憎しみを呼んで戦争をつづける。皆、平和を望んでいるのに世界から戦争がなくならない。次の世代を担うのは、君たちの世代だ。」と気持ちを絞りだすような答えに学生たちは言葉を失った。

そして8月26日には、モンゴル最大のガンダン寺で、AMDA　医療と魂のプログラム、慰霊祭を実施。昨年までは、ノモハン事件戦没者のための平和祈願祭であったが、本年はガンダン寺からの希望で東日本大震災被災者のための慰霊祭となった。AMDAの様々な活動を通して、モンゴル、日本間の市民間における信頼形成につながったと確信する。

おかやま国際塾 ー モンゴル研修

第1回「おかやま国際塾」は、県内の大学生にAMDAが提唱する「市民参加型人道支援外交」に基づいた国際貢献活動の企画、立案および実施のすべてに関わる機会を提供することによって、社会のグローバル化に対応できる人材を養成することを目的としています。パイロット事業として開始した今年は、9名（1名:国内研修のみ参加）の塾生を迎え入れ、7回の事前研修および8日間のモンゴル研修を実施しました（修了式：11月5日）。

事前研修では、4つの講義を受講（市民参加型人道支援外交実践論、国連法、NGO論、モンゴル医療支援）した後で、塾生たち自身でホームステイ先の確保（AMSAモンゴルと直接交渉）、現地で行うプレゼンテーションの準備、モンゴルの歴史および文化の調査、サマーキャンプにおける子どもたちとの交流プログラムの立案などを行いました。

フィールド研修では、塾生たちはモンゴルの学生および現地の方々とすべての時間を共に過ごしました。塾生各々が積極的にモンゴルの学生と交流を図ることによって、文化の違いおよび学生としてできる国際貢献活動の役割について改めて考えたようでした。

*注：AMSA：アジア医学生連絡協議会

孤児院の歯科教育支援

ハラ川清掃

【参加学生】

岡山大学：法学部5名、医学部2名、歯学部1名

川崎医療福祉大学：医療福祉学部1名（国内研修のみ）

【随行者】

AMDA：菅波茂代表、職員／難波妙、大政朋子

現地受け入れ：AMDAモンゴル支部、AMSA* モンゴル

月日	プログラム
8/23（火）	関西空港発 AMSAモンゴル学生との打ち合わせ（ウランバートル）
8/24（水）	駐モンゴル日本大使表敬訪問 AMSAモンゴルの学生と文化交流 孤児院にて歯科支援
8/25（木）	Health Science University in Mongoliaにおいて 菅波奨学金授与式　学生間交流、東日本大震災活動報告（プレゼンテーション） めがねの無料支援をうけた子どもの検診を見学
8/26（金）	ASMPプロジェクトーガンダン寺で慰霊祭 ハルハ川戦争従軍者（白内障手術をうけた患者）との交流 ロシアとの国境にある子ども支援施設のサマーキャンプに向けて出発
8/27（土）	子どもとの交流、健康診断、ハラ川清掃などのボランティア活動 遊牧民族のゲル訪問
8/28（日）	子どもたちおよび現地の方と交流後、ウランバートルへ ゲルキャンプ「天の川」へ
8/29（月）	遊牧民族のゲル訪問および交流、乗馬体験 AMSAモンゴル学生とさよならパーティー（ウランバートル）
8/30（火）	チンギスハン空港発

第１回『おかやま国際塾』モンゴルでの研修を終えて

岡山大学法学部３回生　**東　青葉**（報告書より抜粋）

筆者　右端

今回私は第１回の『おかやま国際塾』の塾生として、モンゴルでの研修に参加しましたが、第１回ということもあり、なにもかもが１からのスタートでしたので大きな不安もありました。準備の段階では、塾生が様々な学部の様々な学年から集まっていたこともあり、打ち合わせの日程の調整に苦労しました。

また、英語のプレゼンの準備が直前になってばたばたしてしまったことも反省点です。早いうちからすることがわかっていて、資料集めなどをしようと話はしていたものの、それぞれの分担部分を全部１つにくっつけて練習するのが出発直前になってしまいました。

モンゴルで日本の大使がおっしゃっていたように、何事も敏速に行動することの重要性を非常に感じました。連絡についても、大使は「今日きた連絡については必ず今日中に返事をする。明日になったらもう意味がない。」と言われていましたが、まさにその通りで、たった１つの連絡事項でも共有する人数が多ければ多いほど全員が瞬時に反応して返信をしないと前へ進まないということが今回の研修では身にしみてわかりました。

東日本大震災の報告　健康科学大学にて

今回のモンゴルでの研修を通して得られたことはたくさんありますが、特に強く感じたことは３つあります。

１つめは世界は広いということです。地理的な意味だけでなく、世界には自分の知らないことが山ほどあって、知らない風景、人々、文化があることを感じました。当然と言えば当然なのですが、たった飛行機で４時間離れた国には聞いたことのない言語を話す人々がいて、見たことのない風景や自然があって、味わったことのない食べ物があり、感じたことのない空間・家があり、どれもどれもが新鮮でした。この感覚は実際に五感で感じた人にしかわからないものだと思いましたし、だからこそもっと世界が知りたい、行ったことのない国へ、会ったことのない人々のもとへ、見たことのない自然の場所へ、大袈裟と思われるかもしれませんが、世界中全ての国へ行ってみたいと強く思いました。モンゴルの草原で星を眺めながらいろんなことを考えていると、なぜか涙が止まりませんでした。たくさんのことを考えて、感じて、そうやって人間は豊かになっていくのではないかと思います。自分という人間を豊かにしていくためには、知らない世界を知ること、感じることが私には必要だと感じました。

２つめは日本人は甘いということです。今回の研修の目的とは少し異なるかもしれませんが、AMSA モンゴルの学生、またモンゴルの子供たちと交流をして、自分たちがいかに子供かを思い知らされました。AMSA モンゴルの学生は私たちより年下の学生が多かったにも関わらず、どの子もとてもしっかりしていました。もちろん仕事をこなしたり、私たちをもてなしてくれたりといった面でも本当にすごいと思いましたが、何よりみんなの堂々とした態度が印象的でした。日本では学生は社会人より甘くみてもらえる、学生だから許されるというのが世間の考え方ですが、モンゴルの学生は例えばオユンナ先生に対しても、学生対社会人（大人）ではなく、１人の人対人として精神的に対等な関係にいるように感じました。まだ学生だからできない、学生だからわからないではなく、１人１人が自分の意思と責任を持って自立していると強く思いました。それは孤児院やサマーキャンプに行って出会った子供たちも同じでした。無邪気でかわいいのは日本の子供たちと変わりありませんでしたが、どの子からも“自分のことは自分でする”という姿勢が感じられました。育て方の違いは貧富の違いによっても起こることなのかもしれませんが、日本人は良く言えば大切に育てられているが、悪く言えば甘やかされすぎている、おだてられすぎているのではないかと思いました。モンゴルの子供たち、学生の生きる姿勢には見習うべき点が多くありました。

そして３つめに国際貢献についていえば、今回の研修で AMDA さんの活動を間近で見て、またその精神やネットワークなどを知って、改めてこういった国際的な支援、また互いに助け合うネットワークの大切さを感じましたし、実際にモンゴルに行って奨学金の授与式、また菅波代表から奨学金を授与された方が今度は自らが奨学金を出すという場に立ち会えて、本当に支援する気持ちの輪がつながって広がっていっていることを実感できました。政府や政府機関などの国のトップにお金が入り結局は下位の国民の人にまで行き届かない支援ではなく、人の生活する現場で迅速に柔軟に活動ができるのは NGO などの非政府組織でこそであって、非常に重要な役目を果たしている、なくてはならないアクターだと思いました。しかし、私個人についていえば正直まだ第三者として見ていることしかできません。国際貢献の必要性もやりたいという気持ちもありますし、また具体的にどんなことができるのかも少しずつわかってきました。しかし、今は日々の自分の毎日を過ごすことが精一杯で、しょうもないことで悩んで乗り越えての繰り返しの毎日です。世界に目を向けて自ら行動していきたい理想はありますが、まだ実現できる能力も余裕もありません。それでも関心を持って世界を知ろうとする姿勢を続けていくこと、たとえ頭の中だけであっても考えて悩んで、こうしたい、こうなればいいのにと思うことに意味はあると信じていますので、日々の自分の毎日を精一杯生きる傍らでいつも世界に目を向けて知ろうとする貪欲さは持ち続けていたいと思っています。

約１カ月の国内研修とモンゴルでの１週間の研修は自分にとって非常に有意義で貴重な経験となりました。この経験を「よかった」で終わらさず、今後につなげていきたいと思います。AMDA のみなさんをはじめ、今回の研修に関わっていただいた多くの方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

AMDA 東日本大震災国際奨学金を受けた生徒達の声

今回、私がAMDAの奨学金を応募した理由は経済的負担を軽くしたいと考えたことにあります。

私が看護師を強く志望している理由は、高校入学時に脳に脳動静脈瘻という病気が見つかり、1年の冬に手術を受けたことがきっかけでした。これからの学校生活に対する不安を抱えている私を支えてくれたのが看護師さんでした。確かな技術と知識をもとに患者の心に寄り添ってくれる看護師さんの姿に共感し、自分も必ず看護師さんになりたいと思うようになりました。しかし、東日本大震災で母の仕事がなくなり、経済状況が悪くなりました。できるだけ親の力を借りずに奨学金を利用して学校に行きたいと考えています。誰もが予想していなかった今回の震災で我が家も大規模半壊となり、精神的にも大きな衝撃をうけました。

そういった中でも他県からのボランティアの方々からの支援を受け、私も立ち直っていきました。この震災で、普段あまり感じることのできないたくさんの人の優しさ、自分は一人ではなく多くの人のおかげで今があるんだということを初めて気づくことができました。この大槌町の医療機関がすべて被災してしまった中で、医療者の皆さんが被災者に手助けをしている光景を幾度と見ました。もし、自分が今看護師の資格があったなら真っ先に駆けつけて被災した多くの人達を少しでも助けてあげたい！と強く思いました。今回の震災で、私が看護師の道を目指しているのは間違いではないと確信できました。

AMDAの皆さんからの奨学金を受け、必ず患者様の心に寄り添うことのできる看護師になりたいと思います。本当にありがとうございます。

◇　◇　◇

私は今回被災をし、高校卒業後に医療系の学校に進みたいと考えているので奨学金を応募しました。

私は、高校卒業後に薬学部に進みたいと考えています。薬学を通して多くの人の役に立ちたいと考えています。今回の震災で薬剤師の母と、薬剤師を目指し大学生活を送っていた姉と、薬剤師になる事を勧めていた祖母を亡くしました。このような事があり、より一層薬剤師にならなければいけないと思う気持ちが強くなりました。薬剤師になることで家族のためにもなると考えています。

さらに私は、被災地で見たボランティアの方の姿に心が打たれました。被災者である私たちのために多くの人が行動し助けていただきました。この感謝を返していきたいと考えています。そのために、今回していただいたように、どこかで災害がもし発生したら足を運び、NGOなどの組織などで活動していくことで、人の役に立てる薬剤師になりたいと考えています。

◇　◇　◇

今回私が奨学金に応募した理由は、震災があったからこそ、この状況に負けずに夢を叶えたいと思ったからです。父は私をここまで男手一つで育ててくれました。また、今回の震災で自宅が全壊し、大変苦しい経済状況となりました。そのため父の経済的負担を少しでも軽くし、いただいた奨学金を今後の進路活動に生かし、夢を実現したいと思い、今回応募させていただきました。

私は高校卒業後、就職進学をして、まずは働きながら准看護師の資格を取得しようと思っています。そしてさらにその後勉強を深め、最終的に高等看護師の資格をとり、人の命を助けるりっぱな看護師になりたいです。

大槌町ではこの震災により、亡くなった方がたくさんいます。大槌高校に避難してきた多くの方々を見て、とにかく助けたい、自分に何かできないか、と思いました。目の前の命を助けること、患者さんが元気になる姿を見ること、そして一人でも多くの人に笑顔になってもらうことを目指し、自分の夢に向かって努力していきたいです。また、こうしてご支援下さる方々への感謝の気持ちを忘れず、看護師として社会へ貢献していける人間になりたいです。

私が「高田」のためにできること

私は将来医師になりたいと考えています。今回の震災で、私は住み慣れた家を失い、母、祖父母、叔母、従姉妹、親友、たくさんの大切な人も亡くしました。震災直後は、これからどう生きていけばよいのかわからず、医師になるという目標も諦めようとしていました。しかし、少しずつ復興に歩み始めた陸前高田の様子を見て、医師になって故郷に帰ってくることで、復興に携わりたいという強い想いが芽生え、もう一度医師を目指すことを決意しました。将来は、患者の病の根源を見つけて治すだけではなく、患者の心のケアもでき、さらに専門をつくらない総合医になりたいです。そして、陸前高田の地域医療に貢献したいと思っています。

震災時に受けた心の傷は、町が復興したとしても癒えるものではないと思います。そのような地元の方々の気持ちが分かるからこそ、私は医師となって故郷に帰り、陸前高田のために働きたいです。

私の将来

私は将来医師になりたいと考えています。きっかけは、ある救急患者が受け入れを拒否され、病院をたらい回しされているという現状を報道番組で見たことです。医師がいることの重要さを改めて感じると共に、自分が医療人として人の役に立ちたいという思いが強くなりました。また、3月の東日本大震災では、医師がもう少しいれば助けられた命もあるのではないかと思うと、非常に残念でなりませんでした。

私は幅広い知識と技術を身につけ、総合医として1人でも多くの人を助けたいと思っています。将来的には、生まれ育った大船渡に帰って来て、地域医療を支える医師として街に恩返しをしていきたいです。また、医療の面だけでなく、沿岸被災地の復興にも貢献したいと考えています。

奨学金を自分のキャリアアップのために有効に使わせて頂き、医学部入学に向けて毎日一生懸命勉強し、実現させたいと思います。

将来の夢

私は、将来医師になりたいと考えています。それは、病気で苦しんでいる人を助けたいと思ったからです。元々、医師に憧れがあったのですが、震災が起きてから、より強くそのように思うようになりました。遠い所から医療チームが避難所に来て、沢山の人の相談に乗ったり、具合が悪い人がいたら、すぐに駆けつけて処置したりしている姿を見て感動し、自分もそのような医師になりたいと思いました。今は、医師不足が問題になっており、私の住んでいる大船渡市も、医師不足が深刻化していると聞きます。なので、自分が医師になって、少しでも気仙に貢献したいと思います。

医師は、人の命に関わる仕事なので、すごく責任が大きい職業だと思います。その職に就きたいという目標のためにも、これからも広い視野を持って、一生懸命勉強していきたいと思います。

将来の夢

私には将来医者になるという夢があります。私が最初にそう感じたのは中学生の頃だったと思います。きっかけは難民の方達の所に行って看病をしている日本人の医者の人をテレビで見たことでした。今私は不自由なく幸せに暮らしているのに世界にはこんなにも辛い状況の人がいて、その人のために頑張っている人もいると思うと心を打たれました。その時から「医者になる」という強い思いが生まれました。

また、今回の東日本大震災のことも思いを強くさせました。たくさんの方が亡くなりました。その人達の分まで今私は生きていると思うと、1人でも多くの人の命を救って幸せにしてあげたいと感じました。

この夢をかなえるために人一倍努力していこうと思います。また、大学の体験入学などに積極的に参加して経験を増やし、より具体的な目標を立てたいです。インターンシップなどにも参加していこうと考えています。

東日本大震災復興支援スポーツ交流プログラム

AMDAが緊急医療活動で入った地域の釜石中学、大槌中学、志津川中学の３校のサッカー部から、先生を含む52人を岡山に招聘して、８月２日から６日にかけてプログラムを実施しました。３日は、震災直後から市をあげて支援活動をおこなってきた総社市との共催として、片岡総社市長様はじめ多くの関係者のご尽力により、総社北公園陸上競技場で試合を行い、４日は、岡山県総合グラウンド補助陸上競技場で混合チームによる交流試合を行いました。熱中症が心配される炎天下での実施に、AMDAの緊急支援活動時に派遣看護師として参加してくれた方々が、再びボランティアナースとして岡山まで駆けつけてくれました。宿泊については、黒住教本部様が、食事共々提供くださり、食べ物のアレルギーの子どもに対しても心を込めてきめ細やかに対応くださいました。宗教者の方々が宗派をこえて集い人道支援活動を行うRNN(人道援助宗教NGOネットワーク)の方々の発案による「絆キーホルダー」の作成と贈呈というご協力もいただき、被災地岡山双方の中学生ひとりひとりの思い出に彩が加わることとなりました。岡山での交流試合の開始前には、ファジアーノ岡山から指導しに来てくださいました。おかやまコープ様も炎天下ご協力くださり記念品もいただきました。５日は広島見学、６日は神戸市長田区防災未来センター等見学後、伊丹空港から一行は帰路につきました。枚挙にいとまない多くの方々の、陰に日向に心を砕いてくださったお蔭により、一連の行事が無事に完了し、被災地の中学生の初めての岡山、西日本の滞在が意味深いものとして、皆の心に刻まれました。この場をお借りしてご協力くださいました皆様に心より御礼申し上げます。

ここに参加校の先生と生徒さんからの感想をご紹介します。

大槌町立大槌中学校　教諭
伊藤　綱俊

大槌中学校サッカー部は、この震災で生徒の７割が家を流され、断水停電も続き、殆どの生徒が避難所生活を送り、何とかこれから生きていくことしか考えられない状況が続きました。本当であれば、３月25日から静岡に遠征に行くことになっていたのですが、当然のことながら全てキャンセルになり、中学校も津波の被害にあったためサッカー道具が全てなくなり、部活動ができない状況が続きました。しかし、その後全国のたくさんの方々から道具を支援していただき、地元の高校のグランドを借りてサッカーができるようになったのは２か月近く経ってからでした。いろいろなことをあきらめていた所に少しずつ光が見えてきた頃に、このプログラムの招待の話をいただきました。生徒たちは岡山に行ってサッカーができると聞いたとき、本当にうれしそうな笑顔を見せてくれたことを強く思い出します。みんなで遠征してサッカーができることは彼らにとって大きな意味があり、大きな希望につながったのです。

プログラムでは、生徒たちは４泊５日の間中ずっといい笑顔を見せてくれました。RNN*絆ミーティングでは、こんなに離れた地区の方々が自分たちのことを心から応援してくれていることを実感し、とても大きな感動を受けました。岡山市内の中学生による手作りのキーホルダーもとても喜んでいました。サッカー大会では、あのような立派な芝生のグランドで、たくさんのすばらしいチームと試合でき、とても楽しんでサッカーすることができました。ホームステイでは、初めどんな人とペアになっているかをすごく気にしていましたが、どの家庭でもとても温かく迎えていただきました。次の日全員がもう１泊したいと言っていたのには驚きました。２日めの交流戦では、他のチームの仲間とサッカーができたことが本当にうれしかったようです。勝ち負けを気にせず、大好きなサッカーを、サッカー好きの仲間と共に楽しめたのだと思います。また、今回のプログラムで、他の被災地の志津川中、釜石中の仲間とも仲良くなれたのは、とてもいい思い出になったようです。同じ苦労をしている仲間もみんな頑張っている姿は、大きな励みになったようです。

３日目、４日目の広島、神戸の見学は、生徒たちにとっていろいろなことを考えるいい機会になったと思います。自分たちの町も必ず復興できると強く感じたようです。

私たちは今、９月22日にようやく完成した仮設校舎で学校生活を送っています。まだまだ大変なことはありますが、たくさんの方々が応援してくれていることを知っている生徒たちは、きっと何でも乗り切っていけると思います。今回のテーマである「絆の大切さ」を彼らは実感しているからです。今、生徒たちは支援していただいた事に応えるために何ができるかを考えています。まず初めに、今目の前にある日常生活のありがたさを実感しながら、一つ一つを一生懸命行うことからスタートしていきたいと思います。私たちがまず、元気に当たり前のことを当たり前にできるようになったことをお伝えすることが、一つ目のお返しだと思います。復興はゆっくりですが、着実に進んでいます。そして今の中学生が大人になったとき、必ず今まで以上の町が、世の中ができると思います。それが皆さんから受けた支援への一番の恩返しになると彼らは考えているからです。これからもずっと生徒たちを見守っていただきたいと思います。本当にたくさんのご支援ありがとうございました。

大槌町立大槌中学校
サッカー部　**田鎖　海太**

３月11日、最初は何が起こっているか理解できませんでした。そしてぼくは遠野中学校に転校することになりました。遠野中学校ではいろいろな方に支援されて頑張ってきました。そんな中に大槌の人から「岡山に行かないか」と言われました。ぼくはうれしくてたまりませんでした。そして岡山に行く１か月位前に大槌に戻ってきて岡山に行くことになりました。１日目、初めて乗る飛行機は興奮しました。２日目の歓迎式はすごくうれしかったです。３日目の交流戦では他のチームと混ざりゲームをして本当におもしろかったです。友達もできました。閉会式の時のプレゼントもうれしかったです。ホームステイではステイ先の矢吹君にはお世話になりました。ありがとうございました。広島も見学しました。自分たち以外にも苦しい思いをしている人たちがたくさんいることがわかり自分も頑張ろうと思いました。夜は岡山に戻り両備ボウルでボーリングをしました。初めてだったけど100点を超えることができてうれしかったです。感謝の気持ちを忘れずに頑張っていきたいです。ありがとうございました。

大槌町立大槌中学校
サッカー部　**藤原　真紀**

ぼくは最初、岡山に行けると知ったときとても楽しみに思いました。AMDAの皆さんのおかげで初めてのことをたくさん体験しました。飛行機も生まれて初めてでした。RNN絆ミーティングに参加してとても神聖な気持ちになりました。また東北３中学校へ手作りキーホルダーをいただいてうれしかったです。キーホルダーは今、大切にバッグにつけています。その晩食べたバーベキューとても美味でした。とても楽しくて忙しい１日があっという間に終わりました。２日目は総社北公園で学校対抗戦サッカー交流でした。とても暑い中での試合でした。結果は２勝２敗でしたが、学んだ事もたくさんあったと思うので、自分たちの新人戦にいかせるようにがんばりたいなと思いました。その後ホームステイ先の阿南君の親がぼく達を迎えに来てくれました。ステイ先では、たこ焼きを食べたり、一緒に花火をしました。とても楽しかったです。

サッカー交流２日目は、色々な中学校の人達とゴチャゴチャになって戦いました。たくさんの人と友達になることができました。また、黒住教本部の宿舎では洗濯などをがんばりました。

最後に、この東日本大震災復興支援プログラムに参加させていただきたくさんの事を学びました。その中でもやっぱり自分たちは一人じゃないということがわかりました。このプログラムを成し遂げるために関わった人達への感謝の気持ちを忘れず日々の学校生活やサッカーの練習を頑張りたいです。

*注：人道援助宗教NGOネットワーク

東日本大震災復興支援スポーツ交流プログラム

釜石市立釜石中学校
校長　**渡邉　真龍**

庭のコスモスが秋の気配を届けてくれる季節となり、釜石・三陸沿岸はようやく秋刀魚が食卓に上り、少し「例年の普段」が感じられるようになってきました。

中国や近畿地方では台風12号・15号の二つの大雨や強風により大変な思いをされたことと思い案じております。

さて、この度の東日本大震災に際し、発災当初から釜石・大槌・南三陸町を中心に、医療・物資など広範囲・分野に亘る人的・物的支援を賜りましたことに衷心より御礼申し上げます。

その上に、8月2日から6日までの4泊5日のプログラムへ参加をさせていただき誠に有り難うございました。

ボランティアセンター参与竹谷和子様をはじめとするスタッフの皆様の「被災地の中学生であることやその心身の発達」に十分に配慮された、かつ非常に工夫された内容で、生徒たちは勿論、引率した教職員一同感謝の気持ちでいっぱいで釜石に帰って参りました。

何よりも素晴らしかったのは、菅波先生をはじめとするAMDAの職員・関係者の皆様の優しい「笑顔とことば」でした。大変な時間をかけ、様々な連絡・調整を図って下さっての実施だった思います。その思いが伝わればこそ、総社東中学校様・香和中学校様・吉備中学校様をはじめ、様々な企業・団体の皆様の御協力があったのだと思います。総社市の片岡市長様をはじめとする職員の皆様が、表敬訪問をさせていた折の玄関でのお出迎えについては「感激・感謝と恐縮」が入り交じった胸の熱さが今でも鮮明に残っています。また、岡山市長様の「いつでもご支援します」の力強いお言葉も後楽園のライトアップの美しさと相まって強く心に残っています。

初日の黒住教本部大教殿での人道援助宗教NGOネットワークによる「RNN絆ミーティング」は、生徒たちにとっては「縁・絆」の5日間のスタートを感ずるに相応しいものでした。千キロ離れた地の香和・吉備両中学校の「絆組紐キーホルダー」贈呈に込められた中学生の思いが、色々な宗教者により理屈を超えた「祈り」によって更に浄化されることを実感したと思います。

原爆ドーム見学では戦争の悲劇と平和の尊さそして福島原発を考える良い機会であり、最終日の長田区では、仕事を中座してのAMDA兵庫県支部江口支部長様の心温まる案内もあり、「釜石もこんな復興の未来がある」と夢を持ったことと思います。

長く浮かばなかった歌や句がこの5日間で四つできました。できたのはプログラムのよさだからと思います。拙く恥ずかしいのですが、思い出に記します。

「三陸の津波は憎し数多（あまた）を奪う吉備は麗し絆は固し」
「薬紙折りし禎子の原爆忌」（原爆ドーム）
「折り紙を高く掲げし禎子の像は今は平らなるかと問いて悲しき」（原爆ドーム）
「蝉時雨イモリも眩し神道山」（黒住教の日拝処にて目の前にイモリが出てきて目が合う）

「普段を取り戻す」が今学期の合い言葉ですが、お陰様をもちまして2学期も順調にスタートし、1学期できなかった様々な学校行事等が順調に実施できています。

つきましては、皆様のこれまでのご支援には、生徒たちの元気な日常を取り戻してあげる努力でしか応えることができないと考えておりますので、そのことをお誓いし、ご高配に心より御礼を申し上げます共に、AMDA様が益々その理念実現の為に邁進なさることを御祈念申し上げ、お礼とさせていただきます。誠に有り難うございました。

釜石市立釜石中学校
サッカー部　**菊池　要**

初め、岡山に行くことになって「自分達だけそんな遠い所に行っていいのか」とか、たくさん色んなことを考えました。当日、岡山に行くと岡山や広島の方達やAMDAの方々がまだ地震のことを心配してくれていてすごくうれしかったです。サッカーの交流試合やホームステイをして“絆”や“笑顔”の力のすごさを改めて感じさせられました。

そして、この合宿を終えて色々なことを吸収できました。本当に、現地の岡山の方、AMDAの方達に感謝しています。ありがとうございました。

釜石市立釜石中学校
サッカー部　**佐々木　汰一**

岡山に行く時、不安でいっぱいでした。自分達だけ楽しくやっていいのか、と思いました。けど、校長先生が言ったとおり「復興の力になるため」なら、いいと思いました。

実際岡山に行ってみると暑かったです。寝苦しかったです。しかも試合中に指を脱臼したり、友達とケンカしたりいろいろ大変でした。けど、交流戦やホームステイをして、他の中学生と交流をしてみて、みんなと協力することって、すごいと思った。

広島や長田区を見学して、生きたくても生きれない人たちのために、釜石を復興させたいと思いました。

南三陸町立志津川中学校
サッカー部顧問　**髙橋健太郎**

この度は志津川中学校サッカー部を岡山にご招待いただき本当にありがとうございました。震災の後、学校は再開したものの体育館が避難所になり、校庭には仮設住宅が建設され、部活動も満足に行なえない環境が続いていました。そのため、この遠征で岡山の広い芝のグラウンドで思い切りサッカーをすることができた生徒たちは、本当に明るく心からの笑顔でサッカーを楽しんでいました。また、ホームステイ先では総社東中のサッカー部員とご家族のみなさんに心から歓迎していただき、本当の家族のように接していただいたと生徒たちから聞きました。また、広島・神戸などを訪れ、戦災や災害から復興した町を生徒たちが直接目にする経験は、今後の復興を見つめていく上で生徒たちに大いに勇気を与えたことと思います。どれも本当に心から被災地の生徒たちのことを考えてくださったプログラムであると感動しました。

この遠征を通して、AMDAのみなさまをはじめ、岡山県の多くの方々に支援していただきました。また、同じ被災地である岩手県大槌町，釜石市の中学校との交流から，互いに励まし合うこともできました。人の温かさ、絆というものをあらためて実感した、一生忘れられない経験となりました。本当にありがとうございました。

南三陸町立志津川中学校
サッカー部　**及川　大貴**

この度は私たち志津川中学校サッカー部を岡山のサッカー交流会に招待していただきありがとうございました。私たちは岡山に招待していただいたことで、たくさんのことを学ぶことができました。

サッカーの試合では岡山県の中学生との交流ができ、新たな友情を築きあげることができました。ホームステイでは、私たちのことを一番に考え、親切にしてくださった温かい心遣いに感動しました。また、広島・神戸では災害にあった町がこんなにも復興している

「絆」の大切さを学びました

のかと驚き、自分たちの町の復興へ向けて勇気付けられました。そして何よりもAMDAのみなさん、総社市のみなさん、岡山市のみなさんなど多くの方々のおかげでこのような貴重な経験ができたことに心から感謝しています。私たち志津川中サッカー部一同はこの経験やみなさんの心遣いを忘れず、これからも毎日を一生懸命に過ごしていきたいと思います。本当にありがとうございました

岡山市立香和中学校
校長　**川 﨑　肇**

「校長先生東日本大震災で被災された人たちに何かできないかと考え、義援金を集めたいと思いますが、実行してもいいでしょうか？」と卒業間際の3年生から申し入れがあったことが始まりです。卒業式で最初の募金活動を行い、その後数回にわたって行った募金をAMDAに届けました。そのことがきっかけで今回のサッカー交流に参加することができました。

当初、サッカーだけの交流と思っていたのですが、「絆キーホルダー」の作成や被災地の中学校の校長先生やボランティアの方とお話しする機会もあり、生徒だけでなく私個人としても、とても有意義な時間を持つことができたことに感謝しています。

「絆キーホルダー」作りでは、簡単に引き受けたものの一時は本当にできるのか心配でしたが、生徒会が中心になり短い期間で何とか織り上げることができました。思っていた以上に心がこもった素晴らしい作品になったと思います。贈呈式では被災地の中学生やRNNの皆様の思いが伝わり、本校の生徒にとってもいい経験になったと思います。

サッカー交流では、本気モードでの試合や、2日目の交流試合ではどの生徒も真剣なまなざしの中にも笑顔があふれ、見ている私たちにも元気を与えてくれました。

この交流の中で特に心に残っているのは「今までも大変でしたが、これからはもっと大変だと思います。」という一言です。震災から5ヶ月が経過しましたが、今後も私たちに何ができるのかを考え、釜石中学校・大槌中学校・志津川中学校と交流を深めていきたいと思います。このような交流の場を与えてくださったAMDAやRNNの皆様本当にありがとうございました。

看護師ボランティアのみなさん等

混合チームで白熱した試合

岡山市立香和中学校
生徒会長　**高田　知佳**

8月2日、RNN主催の「RNN絆ミーティング」に参加しました。被災地である岩手県と宮城県の3つの中学校のサッカー部員と先生方52名に、香和中学校の生徒が心を込めて編み込んで作った「組紐付きの絆キーホルダー」を贈りました。私は、被災者の方と会うのは初めてで少し緊張していましたが、同年代の彼らは、香和中学校の生徒と同じように「明るく元気で生き生きと」前だけを見ているように思えました。今、私たちにはある、「あたり前の生活」に感謝しないといけないと、私は彼らと接したことで改めて思いました。この集まりに参加することで、「今後も、何かできることはないか」と改めて考えるようになりました。

岡山市立香和中学校
生徒会副会長　**山本　崚雅**

AMDAの呼びかけにより、被災地の中学校とのサッカー交流試合が開催されることとなり、僕たちも、そのお手伝いをさせてもらうことになりました。キーホルダーを渡す際に、AMDAの方から「何か一言お願いできない？」と言われましたが、僕たちには想像できないくらい辛い思いをしてきた被災地の中学生にかける言葉が見つかりませんでした。それでもみんなは温かく僕の言葉を聞いてくれました。式が終わった後も「名前は？」「君もサッカーしてるの？」と明るく話しかけてくれました。僕は被災地の中学生の心の強さと優しさを実感しました。この体験を通して僕は改めて被災地の方のために何ができるか考えたいと思いました。この活動が少しでもみんなの心の励みになってくれると嬉しいです。

岡山市立香和中学校
サッカー部　**片山　政宏**

僕たちは、この交流戦を通して、気持ちがとても変わりました。それは、東北の中学校のグラウンドは仮設住宅が建ち中学校ではまともにサッカーの練習ができないと聞き、また同じ部員が転校して一緒に練習ができなくなったと聞いたからです。それなのに、僕たちは当たり前のようにグランウンドでサッカーができていたり、当たり前のように友達と過ごすことができています。そう考えてみると僕たちは、色々なことに感謝して、日々の生活や部活をがんばっていかなくてはと思いました。

岡山市立吉備中学校
校長　**横山　福水**

東日本大震災の発生を知り、本校ではすぐに、生徒会やPTAで義援金を集めました。さらに、5月4日には、吹奏楽部が「グリーンコンサート」と銘うってチャリティーコンサートを行いました。この頃から、相手が見える支援を模索していたところ、岩手県の大槌地区を中心に活動するAMDAの支援プログラムを知り、学校として参加することを決めました。そして、吹奏楽部で集まった義援金を、激励の色紙と共に大槌中学校の吹奏楽部に渡すことができました。

今回の復興支援のプログラムでは、まず、

AMDA復興支援スポーツプログラムに参加させていただいて

両備ホールディングス㈱
観光事業本部長　中原　伸介

8月4日AMDA東日本大震災復興支援スポーツ親善プログラムの交流試合に招かれ、子ども達の試合の主審を務めさせていただきました。今回はAMDAさんの依頼で私共の両備観光にて東北の子ども達の輸送を任されたことと、私も現在地元のスポーツ少年団のサッカーの指導（コーチ）をしていることから、是非何かお役に立てればと思い、参加させていただきました。震災での被害のことを察しますと、恐らくあまり元気な姿は見受けられないかなと思っておりましたが、とても明るく、楽しそうにプレーをしているのを見て、やはり子ども達の生きる力はすごいなと思いました。是非次回は岡山の子ども達が被災地を訪れ、生きる力を対感できればいいですねと先生方と話をしました。このようなプログラムを企画してくれた、AMDAさんをはじめ沢山のボランティアスタッフの方に感謝をしたいと思います。

審判する筆者

「絆」の大切さを学びました

記念品として、「絆キーホルダー」の紐の部分を、1．2年生全員の生徒で心を込めて600本編み込みました。思ったより難しかったですが、RNNの方に教えてもらいながら編む中で、生徒たちの心にも被災地の中学生に対する「絆」が芽生えていったように思います。また、サッカーという、自分たちが最も好きなスポーツを一緒にプレーすることにより、さわやかな汗と共に、彼らの心の「絆」がより深まったと思います。

今回のプログラムを通して、生徒たちは、自分たちは一人ではない、家族をはじめ、いろんな人の支えがあり今の自分があるということ、そして人と人の「絆」の大切さについて、あらためて考えてくれたのではないかと思います。生徒たちに貴重な体験の機会を与えて下さった関係各位に心から感謝します。

岡山市立吉備中学校
サッカー部　**福田　隆晟**

8月3日・4日に、東日本大震災復興支援サッカー交流が行われました。3日は各校と試合をして、4日はチームを混ぜて交流戦をしました。交流戦をした際に、仲良くできるか抵抗がないかと心配でした。しかし、その心配をしていたのが嘘みたいに、話をして仲良く接することができました。そうすることができたのは，東北の中学生の皆が積極的に声をかけてくれたからです。

東日本大震災で東北の人達が失ったものはたくさんあって、それがもう戻ってこないものかもしれません。でも，僕たちの心にない大切なものを彼らは持っているように感じました。僕たちが彼らにできることは少ないと思います。でも、その中でもいろいろ力になれたらいいと思いました。

総社市立総社東中学校
校長　**上岡　仁**

3月11日の震災発生から、本校では3月14日の始業前に全校で黙祷を捧げ、お亡くなりになられた方々のご冥福と、被災された方々の一日も早い復旧復興を心からお祈りいたしました。

本年度に入り、生徒会が中心となって募金活動に取り組んだり，部活動でのチャリティコンサートなどを実施したりして、支援活動に取り組んできました。

こうした折、AMDAと総社市との企画・協力による復興支援サッカー交流のお話をいただきました。本校における支援活動のよい機会ととらえ、喜んでお引き受けいたしました。

サッカー部の生徒は、被災地の生徒の皆さんと交流試合ができることを心待ちにしておりました。また、被災地の生徒の皆さんのホームステイにつきましても、保護者の皆様の深いご理解とご協力により、準備等が順調に進められました。当日は、事前に用意した「よみがえる東北　つながる日本」の横断幕を掲げるとともに、陸上部の生徒60人が応援に駆けつけ、スタンドからも交流試合を盛り上げてくれました。

この度の交流に参加したサッカー部の生徒はもとより、準備や応援等にかかわった多くの生徒、教職員、保護者の皆様にとりまして、心に響く素晴らしい体験になったと思います。そして、「つながる日本」を心から感じることができたと思います。

今回の交流を通して生まれた「絆」を大切にし、今後、復旧復興を支援する活動にさらに取り組んでいきたいと思います。このような貴重な機会を与えてくださいましたAMDAと総社市の皆様に深く感謝申し上げます。

総社市立総社東中学校
サッカー部　**横田　哲也**

8月3日、宮城県志津川中のサッカー部の二人が、ホームステイでうちに泊まりに来た。東日本大震災のことはテレビで見て知っていたけれど、どこがどういう被害を受けて、今どういう状況なのか、僕はそれまであまり知らなかった。南三陸町という地名も、何となく聞いたことがある程度だった。それまでの僕にできたのは、少しの募金と、被災地が良い方向に向かうよう祈ることくらいだった。

サッカーの交流試合でも志津川中と対戦し、その間にも話をしていたので、うちに着いても話が弾んだ。二人ともとても楽しそうだった。僕は普段どおり接しようと思って話をしていたが、そんな中、心が痛むような出来事があった。みんなで写真を撮り、「送るから住所を書いてよ。」と言った時だった。一人が黙り込んだ。住所がなかったのだ。僕は口には出さなかったが、その笑顔の奥にはきっと思い出したくもないような辛いことがあったに違いないと思った。その後、メールアドレスを交換し、これからもずっと友達だから、と言った。

僕はやはり、今普通に生活できていることはとても幸せなことなんだということを強く感じた。今回地震が起きて彼らはとても心細かったと思う。その中で偶然僕たちは彼らと出会い、同じ時間を分かち合えた。これはとても大きなことだと思う。

心が押しつぶされそうになったとき、そんな時に支え合えるのが人であり、生きるということだと僕は感じた。このホームステイを通じて僕らは友達になり、そういった絆を築くことができた。そして、これから先、ずっとこの友情が続くようにしたい。

平成23年度静岡県総合防災訓練参加報告

AMDAボランティアセンター　参与　竹谷　和子

今年8月28日、静岡県牧之原市で行われた総合防災訓練にAMDAは参加をしました。

官民合同の大規模な総合防災訓練（*注）に1996年以来AMDAは2010年を除き毎年参加しています。今年度も、静岡県からの要請を受け、牧ノ原市において救護所を開設し、牧ノ原市救護班として現地のスタッフや現地医師会等合同で訓練を行いました。AMDAからの参加は埼玉県越谷誠和病院の細村医師をチーフに石岡看護師、美甘看護師、岡山大学医学部学生の木本調整員、本部より竹谷調整員という5名のチーム編成です。

当日、牧ノ原市細江コミュニティーセンターを救護所会場とし、朝8:30地震発生後、模擬患者50名が救護所へ搬送されてきました。救護所内でトリアージ訓練とトリアージ後の各エリアにおける収容・応急処置訓練また最重症患者の中で最も緊急を要する患者の病院搬送等の訓練でした。AMDAチーム細村医師がドクターコマンダーとして全体統括をし、救護所全体及び各エリアの中で適切な助言や指導がされました。その下に地元医師会、歯科医師会、薬剤師会の方々、地元スタッフ、AMDA看護師、調整員がそれぞれの持ち場で訓練にあたりました。今年度は東日本大震災後で参加者の方々の意識も高く、それぞれの立場でとても真剣な取り組みをされたと思います。AMDAは牧ノ原市行政や医師会等にトリアージ訓練のノウハウを提供し、共働で訓練を行いました。その中で、模擬患者役や医療器具、薬等調整を牧ノ原市で調整していただき助かりました。事前の打ち合わせを含め民間と行政との協力体制がとても大切であることを再確認しました。今後にも活かしていきたいと思います。

実際に災害が起こった場合、現場の大混乱、人手不足、広域における諸機関への連携等、問題も多々見えてきましたが、今後予想される東海地震や東南海地震に備え、防災全体における救護のあり方についての気付きや検証をする良いきっかけになったと思います。

*注：1996年、97年は東京都内で、以降は静岡県内で実施。

2011年7月～9月の動き

<講演>		
7月1日	地域教育懇談会　　築港新町中央町内会　生徒部	
7月8日	2011年東北関東大震災に関する支援　第1回ボランティア講座	ノートルダム清心女子大学
7月8日	平成23年度建設技術講習会 - 東日本大震災における被災地の実態と支援活動について	(社) 全日本建設技術協会　岡山県協会
7月9日	井原市PTA連合会　運営研究協議会 - 子供の将来（子育て）と社会貢献	井原市PTA連合会
7月11日	ハートフルカフェ～AMDAを知ろう～	おかやまコープ岡山東エリア
7月12日	医学生を目指す若者にむけて	メディカ大阪
7月15日	卓話の時間 - 東日本大震災での活動	誕生寺
7月20日	少年少女のための夏の教室	玉野友の会
7月21～22日	東日本大震災被災地支援のための日米協力　訪米対話プログラム	(公財) 日本国際交流センター
7月22、25日	CSR推進リーダー会議	グンゼ株式会社
7月23日	関西国際保健勉強会（シンポジウム）	関西国際保健勉強会
7月29日	国際ソロプチミストアメリカ日本西リジョン　ユースフォーラム	国際ソロプチミストアメリカ西リジョン
8月1日	平成23年度岡山県立聾学校教職員人権教育研修会	岡山県立岡山聾学校
8月3日	人権教育研修 - 東日本大震災被災地の活動から	岡山市立富山中学校区（保・幼・小・中）学校園
8月6日	全国いきいき公衆衛生の会　サマーセミナーin おかやま	岡山市保健所
8月7日	岡山経済同友会「東日本大震災復興支援ボランティア学生」向けガイダンス	岡山経済同友会
8月8日	アジア有機農業連携活動推進の講演と説明会	アジア有機農業連携活動推進協議会
8月18日	平成23年度イキイキ人間学講座（人権教育連続講座）	ライフパーク倉敷　市民学習センター
8月20日	岡山市民文化大学　第21期8月講座	岡山市民文化大学
8月23日	おかやまコープ倉敷エリア　夏休み親子イベント	おかやまコープ倉敷エリア
8月25日	玉野渋川ライオンズクラブ定例会	玉野渋川ライオンズクラブ
8月28日	北九州市立大学同窓会岡山県支部	北九州市立大学同窓会岡山県支部
8月29日	陸上自衛隊　国際活動教育隊　幹部国際活動課程	陸上自衛隊　中央即応集団　民生協力課
8月31日	とくめきプラザ講演会・交流会	(財) 岡山市勤労者福祉サービスセンター（ときめきプラザ）
9月8日	2011年度クラブ役員・委員長研修会	国際ソロプチミストアメリカ日本西リジョン
9月8日	岡西公民館主催講座「東日本大震災（3.11）が教えたこと」	岡山市立岡西公民館
9月15日	公民館主催講座	倉敷市倉敷北公民館
9月18～19日	国内外の緊急支援を子どもに焦点を当ててみる合宿勉強会	こどもと共に学ぶ会 (Working, With next generation)
9月21日	全校生徒対象教育講演会	広島県立福山誠之館高等学校
9月22日	加茂中学校PTA教育講演会	津山市立加茂中学校
9月28日	おかやコープ新見エリア　AMDA学習会	おかやコープ新見エリア
9月29日	ボランティア活動講演	岡山県立岡山朝日高校
<大学等講義>		
9月1.22.29日	相生市看護専門学校　看護第一学科「災害看護」	
9月4.5.17日	岡山県立大学大学院「災害医療援助特論」集中講義　17日公開講座災害セミナー	
9月10日	放送大学岡山学習センター「社会と経済」スクーリング - 大災害に見舞われた人々の精神的ケア	
<イベント>		
7月2日	第3回AMDA市民参加型人道支援外交円卓会議	
7月17日	おかやま国際塾開講式 / 岡山大学にて　　モンゴル研修　8/23～30	
7月22日	AMDA高校生会大槌・岡山交流会	
7月30日	マリールイズさん (ルワンダの教育を考える会理事長) ミニ講演と AMDA 菅波代表とのトークライブ	
8月2～6日	東日本大震災復興支援サッカー交流　被災地3中学校サッカー部招聘　3日総社市会場　4日岡山市会場	
9月18日	AMDA鎌倉クラブチャリティコンサート Vol.13	
8月24～28日	岡山経済同友会・大学コンソーシアム岡山「東日本大震災復興支援ボランティア」大槌町に受け入れ	
9月23～25日	スリランカ国内スポーツ交流事業	
<研修受け入れ>		
7/29～8/2	岡山市教育委員会主催「20年経験者研修講座社会体験研修」　岡山市立山南中学校教諭　秋山淑恵氏	
<インターン受け入れ>		
7/4～10/7	石崎千里氏　国連平和大学 (大学院大学) 在学	
8/1～8/23	美甘きよ氏　筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科在学	

支援者紹介

国連事務局内に国連職員の奥様方が設立した United Nations Women's Guild　マンハッタングループから、被災地の子どもたちへの文房具にと、ご寄付をいただきました。ニューヨークの国連本部内で T- シャツ等の販売をし、その利益の中からのご寄付です。

（写真下）同グループプロジェクト委員長の Isabel R. Aleta 氏（左端）、AMDA 名誉顧問田島氏夫人（右から２人目）　NY 田島顧問宅にて

インターン紹介

◆ハムカ　ラニ (Hamka RANI)　医師

大槌町でクリニックを再建した植田医師を訪ねて

インドネシアのハサヌディン大学医学部を２年前に卒業した内科医です。AMDA インドネシア支部から３か月の予定で、８月 18 日から本部での活動のマネージメントなどの研修のため来日しています。９月下旬には岩手県大槌町の AMDA の活動地に入ります。どうぞよろしくおねがいします。

◆美甘きよ 保健師

８月１日から 23 日までインターンとして AMDA でお世話になりました美甘と申します。現在 筑波大学大学院に在籍し、主に災害救援者のストレスについて研究をしております。AMDA でのインターン中には、東日本大震災復興支援スポーツ親善プログラム、被災地への看護師派遣の調整業務の補助、静岡県牧之原市での防災訓練等さまざまな経験をさせて頂きました。特にスポーツ親善プログラムでは、被災地の中学生が岡山で元気いっぱいにサッカーをしている姿に、私の方が元気をもらいました。素晴らしいプロジェクトに少しでも携わることができ、光栄でした。今後、これらの学びを大学院での研究に生かしていきたいと思っております。ありがとうございました。

AMDA 高校生会活動報告
東日本大震災復興支援　高校生交流プログラム

高校生会担当　竹谷　和子 AMDA ボランティアセンター参与

2011 年３月 11 日、東日本を襲った地震と津波等の甚大な被害に対して AMDA は即、医療チームを派遣し緊急支援を開始しました。AMDA 高校生会も即、支援活動を開始し募金活動や岩手県大槌高校へお見舞いと励ましのメッセージをおくりました。ほぼ 40 日間の緊急支援活動後、現在、AMDA は、復興支援活動を継続しています。AMDA 高校生会も「自分たち高校生に何ができるか」を考え、被災地の同じ高校生と交流を持ちながら意見を出し合うことで、被災地の様子やニーズを直接感じ、今後の支援につなげたいと今回計画しました。

◆ 活動日程

被災地の一つ、岩手県における AMDA 大槌高校生会２人と引率の AMDA 大槌クラブの会員１人の３人が、７月 22 日来岡し、翌 23 日に岡山国際交流センターで交流会を行いました。この日最初は岡山、大槌相互に報告をしあい、次に昼食用の岡山祭りずしをみんなで作り会食しました。その後みんなで座談会で締めくくりました。またその後岡山県北の新庄村へ大槌高校生たちは移動し、地元の人々や高校生達と交流を深め、翌 24 日帰路につきました。その間の交通費、調理実習費等の一部（５万円）については「国際ソロプチミスト岡山愛の基金」助成金を使用させていただきました。

◆ 活動内容

AMDA は今回の震災において「命を救い、生活を支え、絆を深める」に集約される活動を展開しています。AMDA 高校生会として岡山と大槌の高校生達が交流会を持ち、大槌高校生からは被災後の暮らしなどの情報を、岡山の高校生達は今回の震災の支援の様子を含め高校生会の活動を報告し、お互いの理解を深めることができました。特に大槌高校生達は遠く 1000 キロも離れている岡山からこんなに自分たちのことを心配していてくれたと感激し、大槌町へ帰って地域のために自分たち高校生がもっと頑張らなければならないと、語っていました。岡山の高校生達はもっともっと絆を深めるにはどうすればいいのか、今後の交流をどのように進めていけばいいのかを話し合い、先ずはそれぞれ日々の生活や学習を真剣に取り組むこと、そしてその中で、今高校生としてできること、私たちだからこそできることを考えながら、いろいろな情報発信をし、「元気を与える活動」を目指すことを、今後の活動の方針にしました。

報告会後には参加者全員で昼食として岡山の郷土料理「祭り寿司」を作り、楽しく会食しました。その際、震災直後に大槌町へ行かれた総社市のパティシェ伊藤さんから、ロールケーキの差し入れがあり大感激しました。最初少し堅い雰囲気でしたが、調理実習をしながら、少しずつ緊張もほぐれ、和気あいあいと和やかな雰囲気になり、本当の交流が始まったと感じました。お互い、高校生の普段の生活や同じ世代としての話題に話が盛り上がり、距離がどんどん縮まっていきました。今回、一晩高校生会のメンバーの家へホームスティをしたことも仲良くなれた一つです。事前に岡山の高校生達が準備した手作りのメッセージ入りうちわ 150 本をプレゼントし、一層絆が深まったと思います。

今回のプログラムは岡山から被災地への支援だけでなく、AMDA 高校生会として、大槌町の高校生達も地元の中で今後どんなことができるのかを考え、実践していくことが大切であり、仲間のメンバーと共に行動していくことを、確認しました。先ずは、岡山の高校生会と大槌町高校生会とが、より太い絆で結ばれる活動をすることそして、被災地に対して継続的な支援をしていきたいと思います。